令和６年度　第２回　学校運営協議会
及び　コンプライアンス委員会　報告

１　日　時　令和６年　10 月２日（火）　９:30～11:30

２　出席者

運営協議会：運営委員７人、本校教職員 11 人

コンプライアンス委員会：運営委員会７人、PTA 副会長、本校職員 13 人

３　会議次第

（１）第１回の協議会を受けて（教頭）

（２）本校の自慢（強み）、もう一息（弱み）から取組を検討する

① 職員から挙がった強み、弱みの共有

② グループディスカッション

③ 情報の共有

④ まとめ

（３）コンプライアンス委員会

① 前期の取組

② 児童生徒アンケートの説明

③ 意見、感想

４　協議等記録

（１）第１回の協議会を受けて（教頭）

昨年度のコンプライアンス委員会の中で、子どもが相談できる教員が少ない、教員との関わりが少ない、安心という環境に課題があるという御意見をいただいた。今年度、これを学校経営目標の１番上に掲げ、教員のコンプライアンス意識を高めるという研修を充実させてきた。校内での人権研修、スクールロイヤーを招いての研修を実施した。授業力、専門性を高めるために３人１組での OJT という取り組みも行なっている。各教科に分かれて、各学部での学びについて話をして授業に生かす教科部会も行なっている。

学校の魅力の発信としては、泉町の協力を得て、お便りの回覧に取り組んでいる。新聞掲載の投稿としては、1 学期は開校記念集会、人形劇上演、交流花壇が新聞に掲載された。HP の更新についても意見が上がった。県の様式が更新できて現在作成中であり、もうすぐ HP が更新され新しくなる予定である。

学びや関わりの広がりでは、泉町の方々と花壇づくりを行なった。高等部の生徒が地域の方々と一緒に汗を流し、花を育てるという意識が育ってきているということでとても感謝している。

（２）本校の自慢（強み）、もう一息（弱み）から取組を検討する

① 職員から挙がった強み、弱みの共有

（幼主事）自慢について

学校全体で子供を見守っているということが本校の強みである。また、個の実態に合わせた教育ができていることを自慢に思っている教員も多かった。専門的な教育体制ができており、専門性を高めるための研修を行なっている。まだまだの部分も多いが、自慢に思うし、今後も継承していきたいと思っている教員が多い。環境面については、歴史が長く、多くのOB OGがいる。学習発表会や朱鷺祭、泉町のお祭りに卒業生が集まってくるということも誇りに思っている。卒業生が集まれる場として存在している、大切にしている。地域とのつながりがあることも強みとして挙がった。

（小主事）自慢の取り組み、お力を借りたらもっとできそうなこと

交流活動や外部とのつながりが盛んで、校内全体でまとまって取り組む行事、全校行事、始業式・終業式、給食が盛んである。充実した研修で、より専門性の高い授業、聴覚に配慮した授業を生徒の実態に合わせて日々向上を目指して取り組んでいるということも挙げられた。一方、もう少しできそうだということとして、学校行事にもっと地域の皆さんが参加してもらえるよう告知をする、窓口を広げることが挙がっている。学校から地域へ出て行くことも、もう少しお力を借りればできるのではないか。

（中主事）本校の弱み

生徒が少人数になってしまったことが多く挙げられていた。また、繋がり、連携をもう少し強めていくことができるのではないかという意見もあった。

また、先のことを考えて、もう少しICTについて力を入れて、専門性を高めて行く必要があるという意見や施設の老朽化が教育活動に影響しているという意見もあった。特に、寄宿舎の老朽化は、静岡・浜松聴覚からの入学希望者が減ることにつながってしまっている。

（高主事）弱みに対して力を借りたいこと

外部の方から教えていただくことがあると充実する。たとえば、地域のクラブ、ICTや授業づくりなどの研修。ボランティアなどでの協力もありがたい。

（委員A）：教員からの意見を聞いて、管理職はどう思ったのかを聞きたい。

（校長）：強みに関しては、学校教育目標を実現するために日々取り組んでいることについて、教員が理解して頑張っているということだと思う。もう一息という部分の少人数の学びは、マイナスの部分もあるがプラスの部分もあると考えている。昨日小学部の研修会があり、東北福祉大学の大西先生に来ていただき授業研究会を行ったが、少人数だからこそできること、個の学びがある。そこで基本的な学びを身につけることが社会自立につながるのだという御指導をいただいた。学び合いの中で学びを深めることが難しいという現状はあるが、前の授業での振り返りや違う学校での意見などを投げかけることで、他の意見を踏まえて自分の考えをより深めていくことができる。少人数だからこその部分もあるので、それを生かすことを、意識してやっていこうと確認したところだ。

ICT が弱いという意見もあるが、電子教科書の利用、GIGA スクール構想での iPad や Chromebook を使った授業をかなりやっている現状がある。個々の教員によって差があるが、かなり活用できている部分があると思う。より良い使い方をもっと学んでいくことで、もっと深まっていくと考えている。

施設の老朽化については、寄宿舎が古いから入りたくないという生徒がいるということは確かで、学校として県に投げかけて修繕はしている。しかし、全体を立て直すということになると直ぐにできる事ではなく、できるところからやっているというのが現状である。

学びという面ではさらに御意見をいただき、より良い学習環境にしていきたい、学びにしていきたいと考えている。弱みの部分をプラスに変える御意見をいただきたいと考えている。

(委員 A)：この地域における沼津聴覚特別支援学校の位置付け、この学校がここに存在することにどういう意味があるのか。それが前提にあって考えなければいけないこと。次に、行政的にどうなのか。壊れているから直すというのは対処的なことでしかなく、この地域における寄宿舎を含めての聾学校の位置があって、この聾学校を県はどう考えるのか。それがないと、ここが壊れたから修理しなければいう考え方しかできない。少人数になってしまって、これだけの校舎を抱えていて、将来像からしたら一体何が必要になってくるのかということを考えていくと、整備できてくるのではないか。ちゃんと構想的に考えていかないといけない。その構想の中で地域との連携はどうやって行くのか、地域に応援してもらうのはどこなのか、教員ができることは何か、行政にお願いすることはどこなのか、整理していく必要がある。そういう意味では、先生たちが頑張って考えてくれているが、もう少し大きい視点を管理職が提示していかないと難しいと思う。

(校長)：聴覚特別支援学校として、聴覚障害のある子供が受ける教育機関としてはこの学校は最適だと考える。健聴者と難聴者の違いの中で、言語力や耳にした言葉を覚えて行くことの難しさがある。でも意図的に与えていくことができる環境であること、教科についても聴覚障害のあるお子さんが陥りやすい思考の誤り、苦手な部分を教員が踏まえた上で、授業を進めていくことで、障害特性に応じた学びができる。県内に高等部があるのは沼津だけで、社会に出る前の最後の部分の教育ができることは、この学校の存在意義は大切である。無くしてはいけないし、存在を誇りに思うとともに重い責任感を持って教育をしなければいけないということを常に考えている。子供達を育て、健聴者と同じところで同じように仕事ができて、同じように力を発揮できるようになる、そういう力を持った上で社会に出ていく。その力を身につけることがこの学校の使命だと考える。県が、どう考えているのか公式に出ているものはない。ただ、東中西と１校ずつあり、少人数化している。普通校でも合併協議が進んでいる。静岡地区では静岡視覚の中に知的高等部を入れる新学校の設立があり、特別支援学校の再編も今後危惧されている。しかし聴覚特別支援学校がなくなることは絶対にあってはならないと考えているし、特別支援教育課においてもそのことについては理解してもらっているし、そのための動きも考えていただいている。ただ、将来的なことは見えてこない。大きな括りの中でこういうこと

ができるといいですねという話は言いにくい。でも、５年、１０年のスパンで進んでいくことがあっても今いる子供達をどうやって伸ばしていくかを大事にしていきたいので、御意見をたくさんいただきたい。

② グループディスカッション
２つのグループに分かれて討議を行った。

③ 情報の共有
A グループ：
幼稚部、金岡保育所が交流をしているが Zoom で交流会を行うと、さらに頻繁に顔を合わせることができるのではないか。
小学部で使っているキューサインから手話に移行する際に、子供達は困難さを抱えている。他の聴覚特別支援学校の子供達と Zoom でやりとりする中で、手話を巧みに使っている同級生を見た時に、自分ももっとしっかり手話を勉強しようという動機づけになるのではないか。そういう意味でも色々な学校と Zoom で交流ができるとよい。
地域との関わりでは、実際に子供がこの学校に通った方の感想として、いろいろな場に参加した時に、地域の方とやり取りができたことが、物おじしない自信につながっているようだ。積極的に地域の方と関わることで子供達がここで勉強していることを確かなものにしていく。今後社会に出た時に、この学校ではない聴覚特別支援学校出身の人たちとの関わりもあるので、そういう時の自信にもなっていくといい。実際に交流をしている地域としての意見として、子供達だけのための交流ではない。地域の人達も交流することで大きな喜びと誇りを感じているので、今後も大きく広げていきながら推進していきたい。
施設の老朽化については、寄宿舎の風呂についてはなんとかしてほしい。寄宿舎の中で違う年代の子供との関わりというのは社会性を身につけるという意味で重要なので寄宿舎は守っていただきたい。少人数の中で部活動が、練習にしても何にしても難しい面があるので、何らかの手立てを考えてほしい。

B グループ
繋がりのことについて、具体的に実現できそうなアイディアをいただいた。部活動の交流も含み、さんしんハートフルさんの活動を積極的に活用したり、相談したりしてより実現しやすくなりそうだ。金融講座や就労サポートなどいろいろな講義をお願いすることができる。沼津地区の企業がどんなものがあるのか教員がもっと知って繋がるようにして行くと繋がりが広がっていく。
老朽化については、どんなきっかけで話題が盛り上がるかわからない。クラウドファンディングで施設が整うこともあるので、実現できるかどうかは別としても、発信することできっかけが生まれ、動くことがあるかもしれない。そのためには、世の中の人に本校が必要である、本校は残さなければいけないと思ってもらえないとそういう動きは生まれない。本校の必要性や理念をアピール、宣伝して行く必要が

ある。具体的には、本校ではこういう研修をしているとか、卒業生がこんな仕事についているとか、このような活躍をしているとかアピールしていく。また、地域のお便りと合わせて本校のホームページに来やすいように工夫していく。地域支援部の教員が、地域の学校に難聴理解授業で出ているが、そういうこともこういう学校でやりましたという発信をすることで、この学校の存在の必要性をアピールしていける。

④ まとめ

（教頭）：グループ協議で意見がたくさん出て良かった。
第３回の会議でこんなことに取り組んでいるという報告ができるといい。

（３）コンプライアンス委員会

①前期の取組について

（教頭）：今年度、子供達の命、人権を守ることを学校経営目標の中にトップ項目として入れてある。教員が人権に対する意識を高く持つために、人権研修、スクールロイヤーを招いての研修に取り組んだ。４月からコンプライアンス通信を作り、掲示板に掲げ、意識を高く維持できるようにしている。

②児童生徒アンケート集約の説明

生徒指導課長より、いじめ・体罰・ハラスメントアンケートの集約結果と対応について説明。

③意見、感想

(委員 B)：早めに対応されていていいと思う。

(委員 C)：早めに対応されていてよいと思った。生徒が１年に１回でいいという話があったが、自分の職場では、年３回ストレスチェックを行なっていて、いち早く対応ができるので、早めの対応というのが大事だと感じる。

(委員 A)：丁寧な御指導ありがとうございます。コンプライアンス通信は月１回出すのか？

(教頭)：月１回出せるように取り組んでいる。

(委員 A)：昔は困ったり悩んだりすると保健室だとよく言われ、この学校でも保健室に溜まっている時期があった。今は子供の数が少ないからわからないが、保健室との情報の共有というのはどうなのか。また、アンケートは定例化すると形骸化しやすい。これは記名のアンケートだが、無記名だったらどうなのか。記名だと、書けばすぐに大騒ぎになってしまう。無記名のアンケートだとどう差が出るのか気になった。委員 C の会社では記名なのか無記名なのか。

(委員 C)：記名でストレスチェックを３回、それに伴って面談を行うが、疲れが溜まるのはどうしてだろうと掘り下げていくと原因がわかっていくという形。

(養護教諭)：保健室に来るときは担任に言ってから来るように伝えている。そして、話を聞いたときは、担任に伝えるようにしている。ただ、言葉で話す子だけではなく、心の悩みが体に出てしまう、不定愁訴が出てしまう子もいるので、そういう場

合も必ず担任に伝えるようにしている。必要であればスクールカウンセラーも来てくれているので、それも利用している。

(生徒指導課長)：高等部では、生徒から保健室に行きたいという訴えがあったときは内線で保健室に連絡を入れて、気になる状況があれば知らせるようにしている。

(委員A)：そこが難しい所だと思う。保健室で話したことが、全部担任に伝わってしまう。養護教諭だったら信用できると思って安心して話し、他には影響がないという話し方も当然必要になってくる。養護教諭が抱えている部分、情報共有する部分という塩梅が必要。そうでないと保健室でも話せなくなってしまう。

聴覚障害のお子さんは、相手の気持ち察することが苦手、相手の言ったことをストレートに受け取ってしまう。言われたことが励ましなのか、嫌みなのか読み取る力が弱い。教員から言われた言葉の意図も正しく読み取ることが苦手なので、アンケートの意図を汲んで答えているかどうかという問題もある。

(生徒指導課長)：このアンケートがいじめ・体罰・ハラスメントについての内容で、書かれたことは重大事案である可能性があるということで、記名である必要性はあると感じているが、もちろん無記名だから書けるということもあると思う。もう一つ自己肯定感アンケートも行っており、そのアンケートも含めてトータルすると自己肯定感があるなしでその子供の実態把握ができるという内容になっている。こちらは無記名である。ただ、学年で集めるので誰が書いたものであるか把握できてしまう。こちらのアンケートは無記名なので率直に遠慮なく答えられる。

(委員D)：記名のアンケートだと犯人捜しになるというか、聞き取り調査が始まると段々書きづらくなってしまうのではないか。これはアンケートというスタンスでやるのであれば無記名でやって、訴えについては、実名を出してやった方がいいのでは。自分の会社では、ハラスメントやコンプライアンスに対するホットラインと言うのがあるが、これは全部匿名で出している。名前を出さずに調査がメールで行われる。会社とお子さんのことでは違うかもしれないが、逆にコンプライアンス的にどうなのと気になった。

(委員E)：過去に自分の子もいじめられたということがあった。その時は主事の先生が対応してくれて、すごくうれしかったということを言っていた。中学部に入ってからは心が落ち着かないことが多く、保健室通いが多くなった。当時の養護教諭が話をよく聞いてくれた。同じ年頃のお子さんがいる方だったので、うちの子はこうだよ、だから大丈夫だよと励ましたり慰めたりしてくれ、ほとんど学校を休むことはなかった。養護教諭も担任には言わないよと前置きして話をして、こっそり連携を取ってくれていた。家庭にも報告がきた。本人も保健室に通って相談したと言っても話の内容について教えてくれないが、学校の連携がうまくいっていたおかげで養護教諭を信頼していた。今は高等部になって、悩みもあるようだけど自分の気持ちを言い出せないという現状はあるが、アンケートで自分の思うことを書いたり言えたりする場があるのは、いいと思う。

(委員F)：子供のいじめは、本人にとっても先生にとっても切実なことだと思う。子供が言いやすい人がその子によって違うと思う。話しやすい存在がいること、話を聞いて対応してくれる人がいるというその存在が大事だと思う。アンケートはその中

のツールの一つで、そこで書けない言えない子もいる。記名、無記名で子供の感じ方も違うと思うので、まずは子供が発信した時にどう受け止めてどう対応していくか、その子にとって性格はあるから、その辺を踏まえながら職員間で進めていくといいと思う。

(委員G)：今聾学校の生徒が非常に減り、一教室に一人、１クラスに一人と言う教室があり、プライベートなことを引き出すのが難しい。外部から支援をしていただくというのもいいと思う。それがない状態だと思うので、きちんと生徒と外部とのつながりをつくっていくことが一番大切ではないか。また、生徒たちが卒業した後、どうやって生きていくかの知恵、痛みを経験させることが必要だと思う。今、社会の中では労働人口が減っているし、外国人労働者が増えている状況になっている。その中で状況を見ながら生きていくコツを身に付けていくことをしっかりしないと心配だと思う。

(委員H)：小中学校の様子で知っている限りでは、教員の子供に対する体罰、子供同士のいじめなどの暴力的なこと、暴言的なことはぐっと減っている。代わりに圧倒的に増えているのが、SNS等を使ったネット関係のいじめ、ネットを通した性の問題裸の写真を撮られた、拡散されたのということを含めての問題が圧倒的に多く、対応に苦慮しているところである。高等部の生徒はみんな携帯を持っていると思うがこういうことは大人より子供の方が圧倒的に扱いに慣れているし、裏の操作も巧みだ。こういうことは問題が見つけにくい。ネット関係のいじめは場合によっては命を落とす子もいる。難しいことだがネットモラルが重要。今問題がないということではなくて、あるということを前提にして、是非積極的な指導やインターネット環境の整備もやっていく必要がある。今後大きく関心を持つべきことになってくる。

(委員A)：生徒アンケートの相談できる人がいる場合、誰に相談しやすいのか。

(生徒指導課長)：相談できる人がいると答えた児童・生徒には、誰に相談するのかを記述させた。兄弟、担任という記述があった。高等部では、話しやすい人に相談に行っている。私たちも話を聞いたよと言うことなく、陰で情報を共有し、抱えているものがあることは知った上で、いつも通りに接するようにしている。相談できる環境づくりに努めている。

(委員A)：実際には傾向としてはどうなのか？

(生徒指導課長)：担任という記述はまあまあいた。母親が一番多くて、友達というのも小学部からは半数くらいいる。それぞれ相談相手は異なっている。

(委員A)：相談する人がいないという人に対して、もし相談したかったらどういう人に相談したいのかというのもあっていいのではないか。

(生徒指導課長)：今後検討したい。

(教頭)：貴重な御意見をいただいた。子供たちの心と体を守る、安心して学校に来ることができるということを基本に考えているので、御意見をまた参考にしながら考えていきたいと思う。

(校長)：このコンプライアンスに関しては、生徒の安全安心を第一に考えていかなければいけないと考えている。また、生徒がどういうことを悩んでいるのか把握していくことも大事だし、それにどう対応していくのかも大事だと考える。今回出てい

ないが、保健室の利用の数のデータを出していくことで見えることがあるかと思う。今後出てくるであろうSNSの問題の対応については、９月に外部の方を招いてトラブルに備えるような講義を行った。それは小学部の保護者も参加した。できるだけ問題が起こる前に、できる対応はこれからもやっていこうと思う。また、心配になることは出していただいて対応をしていきたいと思う。生徒が安心安全で過ごせる学校づくりについて御意見をいただいていきたい。

（今後の予定）

第３回　学校運営協議会　２月１９日（水）